「常陸国風土記」と常陸大宮市

常陸国風土記 1300年記念

【風土記について】

都が奈良の平城京にうつり、私たちが歴史で奈良時代とよぶ時代になってすぐの和銅６年（西暦713年）、「郡・郷の名は、好い字を使って表記し、各国のそれぞれの郡内に産する有用な鉱物や動・植物、また、肥沃な土地であるか否か、河川名や地名の由来、老人が言い伝えている話などをまとめ、書物として提出しなさい」という詔（天皇の命令）が全国に出されました。この命令によって国ごとにまとめられたのが、「風土記」であるとされています。

平成25年（2013）は、この風土記撰進の詔が出てから、ちょうど1300年の節目の年にあたります。

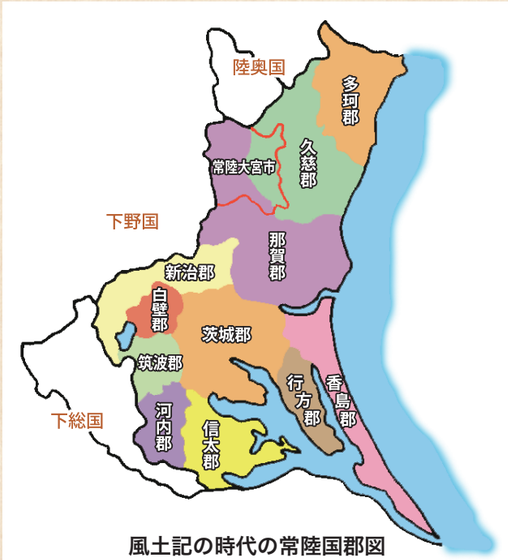
【「常陸国風土記」は東日本で唯一の風土記】

当時、60カ国ほどから提出されたと考えられる風土記のうち、現在もまとまった形で残っているのは、播磨（兵庫県西南部）、出雲（島根県東部）、豊後（大分県の大部分）、肥前（佐賀県と長崎県の一部）、常陸（茨城県の大部分）の５つの国の風土記にすぎません。その中で「常陸国風土記」は東日本で唯一残る風土記であり、奈良時代はじめのこの地の様子や人々の暮らしぶりの一端を教えてくれる、まことに貴重な史料となっています。

【「常陸国風土記」が発見されたのは江戸時代】

「常陸国風土記」も、他の多くの風土記と同じく、ごく一部分だけが引用文などとして古い書物に書き写されたのみで、長い間にほとんど失われてしまい、一冊の本としては残っていないと考えられていました。ところが、江戸時代前期の延宝年間（17世紀後半）に、水戸藩の「大日本史」編さんに関わる調査の過程で、加賀前田家が所蔵する書物の中から「常陸国風土記」の写本が発見され、存在が明らかとなりました。前田家にあった「常陸国風土記」は現在伝わっておらず、今私たちが読んでいるものは、水戸藩の関係者が書き写した「常陸国風土記」が元となっています。

しかし、残っている風土記の中で、ほぼ完全な形であるのは「出雲国風土記」のみで、前田家で発見された「常陸国風土記」も、半分以上が省略されていると考えられる抄本でした。

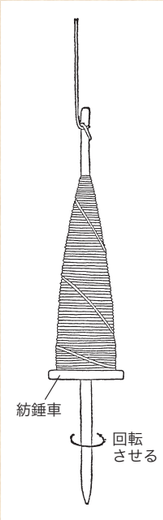


風土記の時代の常陸国郡図

【弥生時代後期から盛んだった機織り】

風土記に記載された「遠い昔の綾」が、いつの時代のどのような織物であったのかは分りません。しかし、古代の静織の里の一部であった市内下村田や上岩瀬の弥生時代後期の遺跡からは、機織りが盛んであったことを示す、糸をつむぐ用具の一部「紡錘車」が数多く出土しています。紡錘車の中心の穴に長さ30cm程のカギのついた棒を差し込んで固定し、回転させることで植物の繊維などに撚りをかけて糸をつくり、機織りをしたのでしょう。同じく静織の里のほぼ中心、那珂市静に鎮座する静神社の祭神が、織物の神であったことも、風土記の記載との関連を示します。

様々な形の土製紡錘車（市内上岩瀬　富士山遺跡出土）



【玉川のメノウ】

玉川に近い泉坂下遺跡から出土した赤いメノウ

静織の里の北に流れる小川は、現在も玉川と呼ばれています。昔の人々は、美しい石を“玉”とよびました。現在は河川改修に伴う護岸工事によって拾うことが難しくなっていますが、風土記の時代のままに、流域では赤いメノウを数多く見出すことができます。古代に餘部郷とよばれた、現在の市内諸沢や北富田でも、数十年前まで火打ち石としてのメノウの採掘が行なわれていました。江戸時代は質の良い火打ち石として大量に移出され、江戸で消費された火打ち石のほとんどが、茨城県北部地域で産出したメノウであったといわれています。

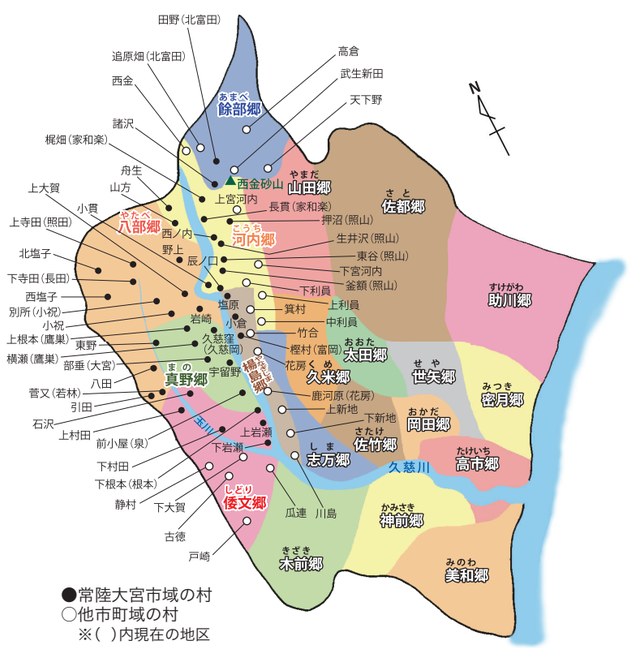
メノウは石英の細かい結晶が集まってできた鉱物で、石英の成分を含む熱水が、地層の割れ目などに沿って上昇し、冷える過程で結晶して形成されます。諸沢や北富田のメノウが、海底火山で噴出したマグマが冷え固まってできた男体山火山角礫岩の断層などに沿って白色の岩脈として見られるのに対し、玉川流域のものはオレンジ色や赤色の礫として発見されます。縄文時代の矢じりにもメノウが多く使われており、太古の昔より今に至るまで、メノウは当地の人々にとって有用な上に美しさを備えた、魅力的な石であることが理解できましょう。

〈主な参考文献〉

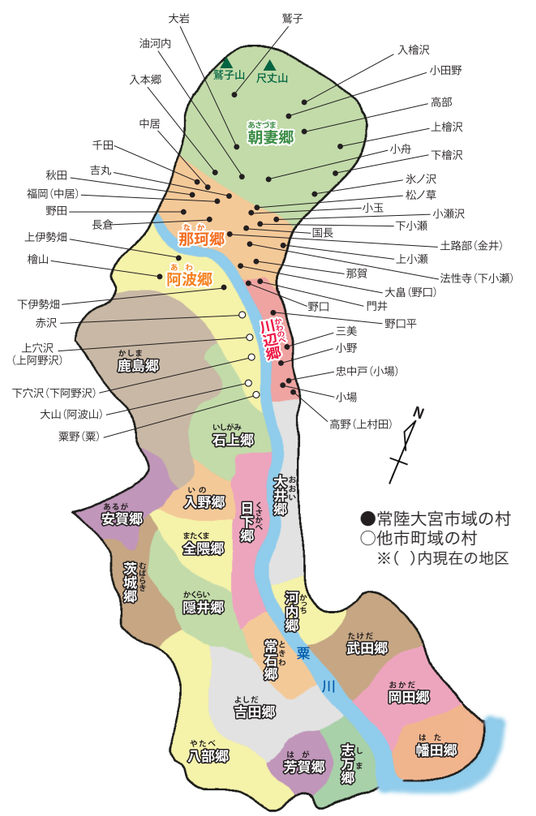
常陽藝文編集部『常陸国風土記』1992（財）常陽藝文センター、宮崎報徳会編『新編常陸国誌』1981常陸書房、菊池芳文『常陸大宮の地下資源―地域をささえた宝物―』2013常陸大宮市歴史民俗資料館

〈編集〉　常陸大宮市歴史民俗資料館　〒319-2265茨城県常陸大宮市中富町1087-14　TEL/0295-52-1450

〈発行〉　常陸大宮市教育委員会　〒319-2292茨城県常陸大宮市中富町3135-6　TEL/0295-52-1111(代)



古代の久慈郡郷図 ※『新編 常陸国誌』掲載地図をもとに作成



古代の那賀郡郷図 ※『新編 常陸国誌』掲載地図をもとに作成

【風土記の時代の常陸国】

古代の常陸国は、香島（のち鹿島）、行方、信太・河内（のち稲敷）、筑波、茨城（のち東・西茨城）、白壁（のち真壁）、新治、那賀（のち那珂）、久慈（久自とも表記）、多珂（のち多賀）の11の郡からなっていました。当時、霞ヶ浦や北浦は今より広く遠浅の海でしたし、郡や国の境界線については、はっきりとは分かりません。

【風土記の時代の常陸大宮市域】

現在の常陸大宮市域は、当時の久慈郡と那賀郡の一部です。古代の郡の範囲は、私たちの知る平成の大合併前とは大きく異なり、久慈郡は大子町の大部分を除く久慈川両岸の地域、那賀郡は那珂川（当時の称は粟川）両岸に広がる地域でした。久慈の郡役所は常陸太田市大里にあったと推定されていますが、那賀の郡役所の位置は特定されておらず、いずれも水戸市内の、飯富、渡里、河和田の３説があります。

江戸時代の末にまとめられた『新編 常陸国誌』によると、久慈郡は19郷からなり、真野郷・八部郷の全域と、倭文（静織とも）郷・楊島郷・河内郷・餘部郷の一部が現在の常陸大宮市域に、一方、那賀郡は22郷に分れており、北部の朝妻郷・那珂郷・川辺郷の全域と、阿波郷の一部が市域にあたっています。

【「常陸国風土記」にある 常陸大宮市域に関する記事】

現代の私たちが目にする「常陸国風土記」には、いたるところに「最前略」や「以下略」と書かれており、多くの部分が省略されていることがわかります。ですから、現在の常陸大宮市域に関することも、風土記の原本にはもっと多く書き上げられていたと考えられますが、残念ながら那賀郡の記述の中には見当たりません。

常陸大宮市域については、久慈郡の河内郷と倭文郷の部分に記載があり、今も残る自然物や言い伝え、発掘調査によって出土した遺物などに、1300年前に書かれた風土記の記事を彷彿とさせるものがあります。

《河内郷についての記事》

郡役所から西北二里半余りのところに、河内の里があり、もとは古古の村と呼んでいました（この土地の人々は、猿のなき声を古古といっているそうです）。東の山には、表面が鏡のようになっている石があります。その昔魑魅が住んでいて、集まってその石を玩ぶようにして見ていると、いつの間にか退散してしまうのでした（この土地の人がいうには、疫病をもたらす魑魅も鏡に向かうと、ひとりでに姿を消してしまうものだといいます）。そこにある土の色は、紺色に近く、画に用いると美しいそうです（この土地の人は青土とか、「かきつに」ともいっています）。時には朝廷の命によって、この土を取って献上することもあります。この土地の人の話では、久慈河はこの河内の里から流れ出ているといいます。

《倭文郷についての記事》

郡役所の西一里余りのところに、静織の里があります。遠い昔、この地方に模様入りの綾を織る織機を知る人がいない時期に、この村で初めて綾を織ったのに由来して里の名になりました。この村の北に小川があって、そこの川石の中にはメノウ石が混じっています。色は丹く、火打ち石にたいへんよく、それで玉川と呼んでいます。

（『常陸国風土記』常陽藝文センター 1992より引用）

【石鏡のはなし】

西金砂社本殿の猿彫物

郷名となっている「河内」は、水源をあらわす地名です。久慈川にそそぐ浅川や諸沢川の源は現在の西金砂山ですので、当時の人々は久慈川の水源をこの地と考えたのかもしれません。この地は、「ココ」という猿の鳴き声が村名となっていたほど、猿が多く生息していたのでしょう。「金砂の雷は常陸一国の雨」といわれるように、金砂の神様が水を司ると考えられたことや、金砂神社に猿にまつわる伝説が多いことなどを考えると、たいへん興味深い記述です。

東の山にある表面が鏡のような石は、旧生井沢村鏡山（現市内照山）にある、昭和11年に県の天然記念物に指定された「鏡岩」のことといわれています。現在は風化して、鏡のような光沢はほとんど失われていますが、かつて金砂マチ（金砂神社の例祭）に向かう女の人たちは、途中この岩に姿を映して身だしなみをととのえたそうです。江戸時代の末にまとめられた『新編 常陸国誌』には、近年の山火事によって少々光沢を損じた、とあります。

光沢を失った現在の鏡岩（市内照山　撮影／菊池芳文）

鏡肌を持つ月鏡石

鏡岩は、1700万年ほど前に形成された小石を含む砂岩が、巨大地震によって、ずれて切断され、その後の数度にわたる大地震で断層面が擦れて磨かれ、鏡肌と呼ばれる、光沢ある滑らかな平面を持つようになった岩です。のちには「月鏡石」とも呼ばれています。当時の人々が、どのようなものを「おに」と呼んだのかは分かりません。しかし、見る者の姿を映す鏡岩に、特別の力があると考えていたのは間違いないでしょう。

青色の絵の具になったという「あおに」については、諸説ありますが不明です。